

見える・繋がる・育む須崎 ~日常を地域の魅力に変える作法と実践~

課題① 須崎のまちの現状

旧須崎町の課題と現状

<現在の須崎のまちづくり>

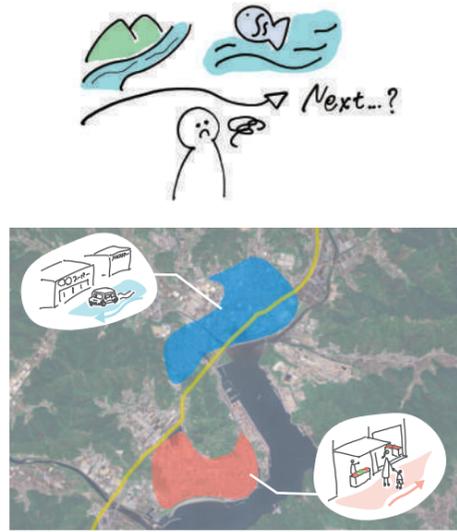
- 現在の須崎が発信している魅力として、自然を生かしたレジャーや漁師町での釣り体験等が挙げられます。これらの観光資源は一定の集客力を持ち非常に魅力的ですが、それだけではローカルツーリズムとして一般化され他地域との競合となります。そうならないためには魅力的な新しいコンテンツを産み続けなければならない、いずれ苦しい状況がやってきます。
- 須崎の日常の魅力を無理なく発信できる仕組みが必要になります。

<取り残されたされた旧須崎町>

- 旧須崎町は国道56号線に沿って多ノ郷駅周辺に大手チェーン店が立ち並んだことなどの影響によりまちを訪れる人が減少しました。
- 自動車利用が一般化された現代、チェーン店は入りやすい一方、用事を済ませたすぐに立ち去ってしまいます。
- 高速道路の開通により旧須崎町、更には多ノ郷駅周辺地区も同じく通過点としての存在が色濃くなっています。これはどの地方都市においても同じことが言える問題です。

<須崎のまちのスケールとノスタルジー>

- 一見とり残されたように見える旧須崎町ですが、開発されなかったまちであることの良さも存在します。
- 約15分で歩ける範囲をプロットしたところ須崎駅から旧須崎町内のほとんどがすっぽりと収まります。また、須崎のまちは平坦です。歩いて回るには最適な条件の揃ったまちとなっています。
- 昭和時代の建物や店舗が残っていることも魅力の一つです。これらはまちの人々にとってはごく普通の光景かもしれませんが、初めてこの地に訪れる人にはとても新鮮で、どこか懐かしいものとして感じられます。
- 普段の何気ない日常の中で須崎のまちに蓄積された時間や記憶はこのまち独自の風景であり、このまちの魅力です。



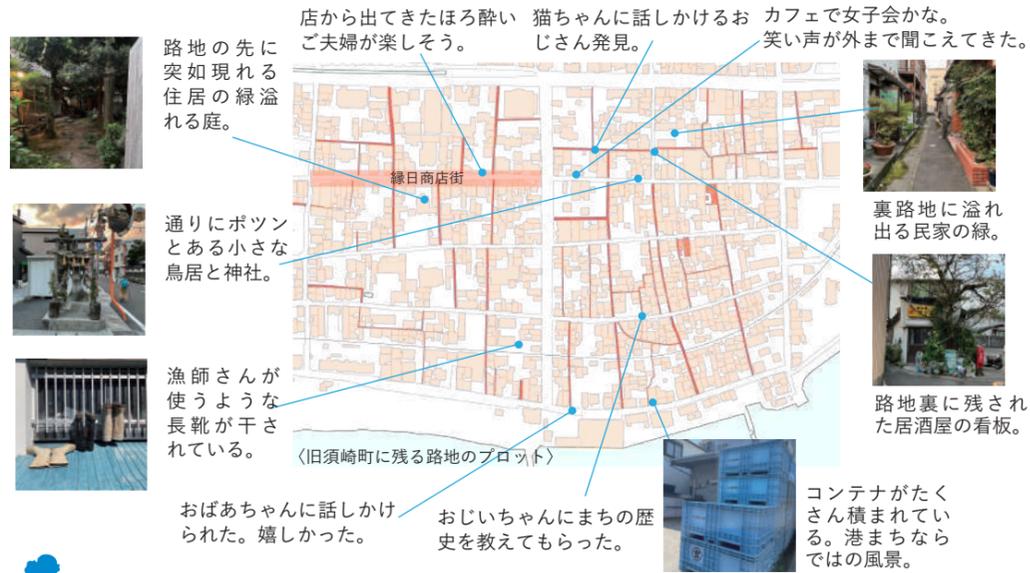
<旧須崎町と多ノ郷地区の関係性>



<須崎駅から徒歩15圏内の範囲>

歩くことで見えてくる須崎の日常の魅力

旧須崎町の中心商店街付近には数多くの路地が存在します。リサーチの中で須崎のまちに住む人々の生活の気配をいくつも垣間見ることができました。



まちの中の活動

須崎のまちの中には様々な活動が見られました。それらはその規模感や存在のあり方から3つに分類することができると考えました。

<小さな活動>

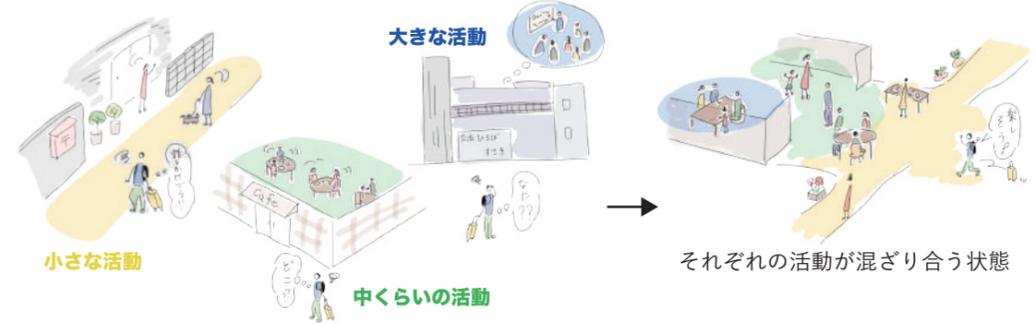
路地裏や軒先で出会った人と立ち話をするなどの日々の生活の中で偶発的に起きる集まり。

<中くらいの活動>

カフェやレストランなど普段立ち寄る場所での気軽な集まり。小と大の中間のような存在。

<大きな活動>

公民館の中での講演会やお料理教室、音楽会といった特定の目的を持った集まり。ある程度の準備や組織の運営が必要となる。

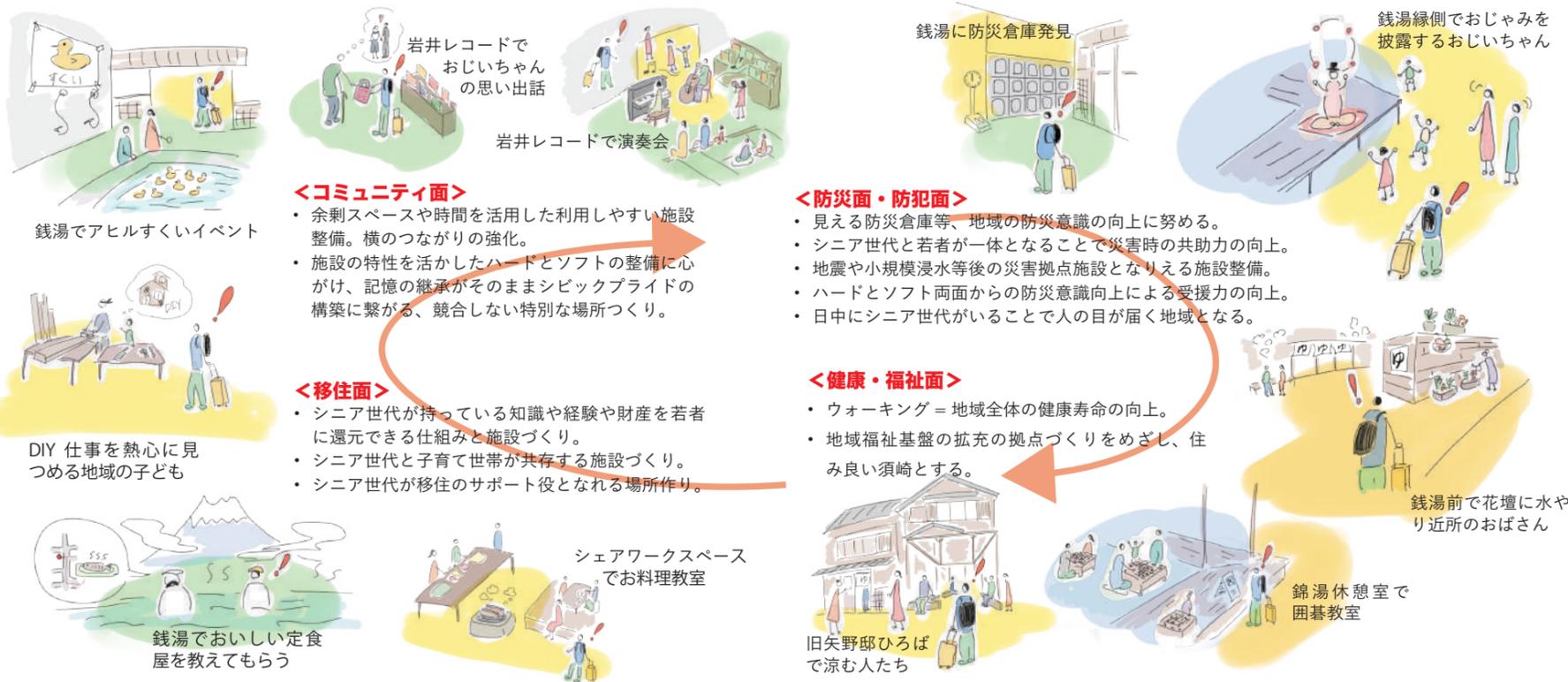


- 現状ではこれらまちの活動のほとんどが屋内に限った、閉じたものとなっています。それらはまちの外部から来た人々にとっては見つけづらく、また、見つけたとしても入りづらいものとなっています。
- 活動を外に開き「見える化」することで、その存在が外部の人にも認知されるようになり、活動の新たな繋がりが生まれます。

課題② ホテルと温浴施設が担う役割

地域に開かれ見える繋がる活動

- ホテルと温浴施設ではデザインを整え統一するのではなく、両者が持つ個性を拾い上げ、それぞれの全く違った場合の活動が「見える化」する改修プロセスを踏みます。
- 岩井レコード店ではホテルに加え、シェアワークスペースやギャラリーを設けます。DIYや展覧会なども行うことができます。
- 錦湯では、温浴施設に加え、庭に開かれた休憩所や子どもたちの遊び場を設けます。囲碁・将棋大会を行ったり、子どもたちが学校帰りに宿題をしにくることもできます。
- それぞれの施設で生まれる活動は大・中・小全ての活動に対応できるように計画します。これらの活動は路地や街路に開かれ、見えることでまちへと繋がります。
- 地域レベルで行われる活動があちこちで見え、周辺の施設やまちの中に存在する大・中・小の活動と混ざり合うことで須崎のまちが持つ個性が増幅されると考えます。



<コミュニティ面>

- 余剰スペースや時間を活用した利用しやすい施設整備。横のつながりの強化。
- 施設の特性を活かしたハードとソフトの整備に心がけ、記憶の継承がそのままシビックプライドの構築に繋がる、競合しない特別な場所づくり。

<移住面>

- シニア世代が持っている知識や経験や財産を若者に還元できる仕組みと施設づくり。
- シニア世代と子育て世帯が共存する施設づくり。
- シニア世代が移住のサポート役となれる場所作り。

<防災面・防犯面>

- 見える防災倉庫等、地域の防災意識の向上に努める。
- シニア世代と若者が一体となることで災害時の共助力の向上。
- 地震や小規模浸水等後の災害拠点施設となりえる施設整備。
- ハードとソフト両面からの防災意識向上による受援力の向上。
- 日中にシニア世代がいることで人の目が届く地域となる。

<健康・福祉面>

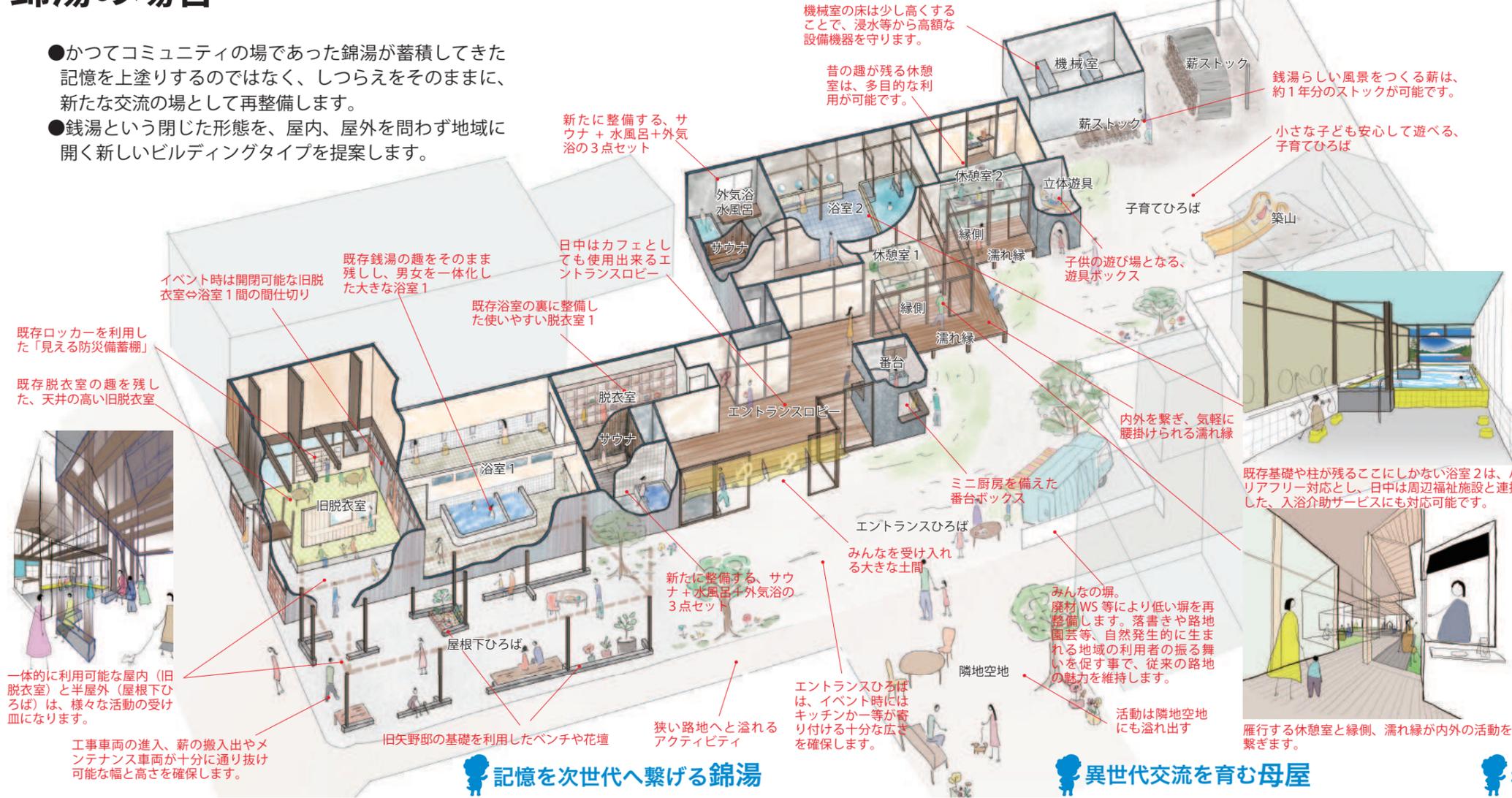
- ウォーキング＝地域全体の健康寿命の向上。
- 地域福祉基盤の拡充の拠点づくりをめざし、住み良い須崎とする。

育まれるまちづくり

- これから行う改修においても同じようにその場の個性を抽出し、活動を「見える化」していくことでそこに新しい「場合」の活動が現れます。
- まちに現れる新しい活動はそれぞれが違った場合で共存し地域レベルでの競合を生みません。それが須崎のまちで行える持続可能なまちづくりのあり方ではないかと考えます。
- 地域住人の生活の気配や活動が混ざり合い、つながっていく事で、大きな須崎特有の活気が生まれます。それはやがて近隣他地域との差別化にもつながる須崎独自の個性となります。
- 以上の方針を土台とし、今後10年、20年、動き続けるまちづくりの第1段階目として錦湯、岩井レコード、二つのそれぞれの「場合」の提案を行います。

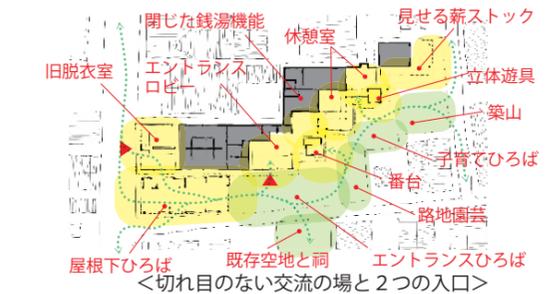
錦湯の場合

- かつてコミュニティの場であった錦湯が蓄積してきた記憶を上塗りするのではなく、しつらえをそのままに、新たな交流の場として再整備します。
- 銭湯という閉じた形態を、屋内、屋外を問わず地域に開く新しいビルディングタイプを提案します。



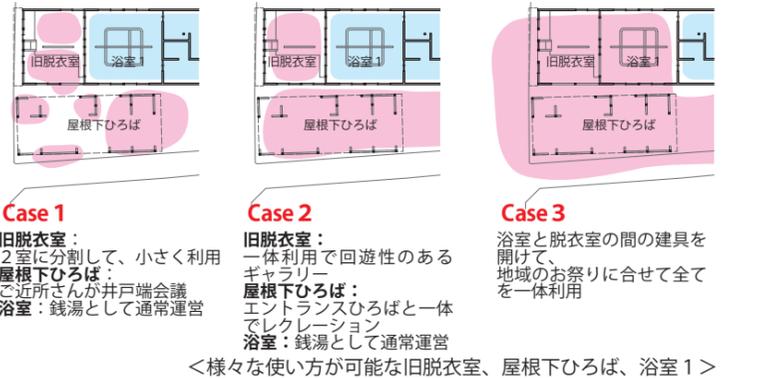
町と繋がる配置計画

- 既存錦湯ファサードを残したまま、裏側の母屋との接続部を新しいエントランスとして整備することで、2つの顔を持つ銭湯となります。
- 視線等の問題から壁や塀で閉じてしまいがちな銭湯というビルディングタイプの外側に地域に開放可能な部屋と3つのひろばを巻き付ける事で、南北に切れ目のない活動の場をつくり出します。
- さらに既存母屋の雁行に沿ってひろばを整備することで、内外を一体的に利用可能です。
- 雁行するひろばは南北に通抜け可能とし、前面道路と南側路地、さらには西側にある空地までを含めたネットワークの核となる立ち寄りやすい環境とします。



記憶を次世代へ繋げる錦湯

- 旧脱衣室、浴室共に可能な限り既存の設えを残します。
- 既存浴室は中央間仕切り壁を一部残したまま2室一体の昭和レトロな浴室1とし、南側に新たに脱衣室とサウナを整備します。
- 旧脱衣室は当時の設えをそのままに、床と天井を一部撤去して明るく風通しの良い空間とします。番台やかつて男女を分けていた壁をそのまま利用し、奥⇄表⇄屋根下ひろばへと段階的に分節された構成は様々な活動の受け皿となります。
- 西側には屋根下ひろばと繋がる大きな出入口を設け、一体的な利用が可能とします。
- かつて浴室と旧脱衣室を仕切っていた建具は視線・断熱性・腐食等の対策を十分に行った上で保存します。イベント時には建具を当時の用に使え、一体的な利用も可能です。



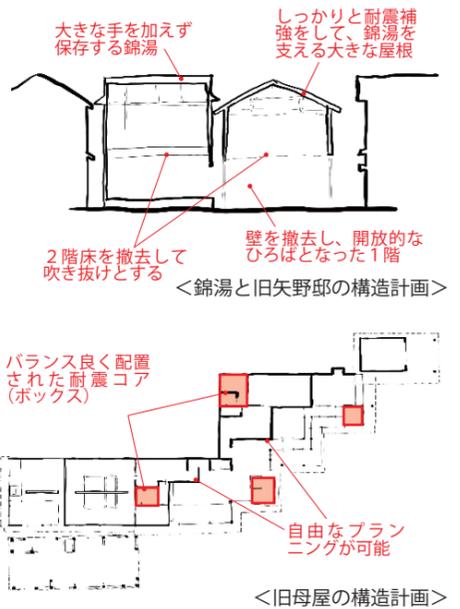
異世代交流を育む母屋

- コンパクトにまとめた浴室2やサウナは、既存の基礎や柱、床の間等の設えを防水・防腐処理を施した上で利用し、ここにしかない特別な浴室とします。
- 母屋の雁行をそのまま活かして広場に面する部分にエントランスホール、休憩室1、休憩室2を並べ、日中は縁側から出入りできる開放可能な部屋とします。
- 番台ボックスには小さな厨房を設け、簡易なバーや駄菓子屋さんの運営等も視野に入れた新たな銭湯の付加価値の創出を目指します。
- 子育てひろばの一部として使用する遊具ボックスは、幼児が安心して遊べる立体遊具を内包します。さらに、夜間は銭湯のキッズスペースとなります。



安心安全を感じる構造計画

- 旧矢野邸は、仕上げを撤去し残した既存躯体は耐震補強して錦湯と繋げることで錦湯の耐震コアとして機能すると同時に、自身は屋根付きのひろばとしても機能する構造計画とします。
- 母屋には機能と耐震性能を併せ持つボックスを点在させ、必要な機能と耐震コアを補充する計画とし、既存建物に不足している耐震能力を補強しながらも自由な設計空間を実現させます。



施設運営に寄り添う設備計画

- 既存の設えを残しつつ可能な限り断熱改修を行い、須崎市の季節や活動に応じた多様で快適な室内環境をつくと共に、ランニングコストの低減を図ります。
- 薪ボイラーによる地場木材使用によりランニングコスト低減を図り、太陽光パネルの利用も視野に入れ、日常時から災害時まで安定した電力供給に役立てます。
- 薪ボイラーは煙の少ない機器選定と排煙に十分配慮した煙突を整備し、近隣への煙害対策を行うとともに銭湯らしい地域のランドマークを創出します。
- 屋根で豊富な降水を効率よく集水し、灌水として利用します。

様々な活動が見える屋根下ひろばと大きな屋根

- 旧矢野邸を完全に解体することによる須崎の町並みの歯抜け化を避けるため、2階以上の外壁と屋根を保存することで風景を次世代へと継承します。
- 保存した旧矢野邸は新しいひろばにかかる大きな屋根となり、地域住民の交流を優しく包み込みます。さらに、既存基礎を利用したベンチや花壇は他にはない特別な場をつくり出し、旅行者との交流の手がかりとなります。
- 保存される柱や庇は、新たに整備される銭湯エントランスへ人々を迎え入れるゲートとなります。
- 2層分の大きな気積(吹き抜け)を持つ旧錦湯脱衣室と旧矢野邸は対になり、夜間はまちを優しく照らす大きなランプシェードの様に須崎の新たなシンボルとなります。
- 十分な高さのある屋根は、薪の搬入やキッチンカー等の進入、高さを活かしたアート作品の展示等にも利用できます。

